

のなかには古来より海運技術の継承もあり、造船・船主・船員により島外からの外貨を稼ぐ土壌があった。その意味で、大崎上島・倉橋島は瀬戸内海で船に関する資料の宝庫であり、モータライゼーションの台頭、およびトラック輸送の充実に至るまで長い歴史の中で船が、主役であった。以下に芸予諸島周辺地域である、大崎上島並びに倉橋島の例を示す。

(1) 大崎上島における特徴

① 文化人・有識者

若杉慧（昭和19年～23年まで広島商船に在職、在職中に「エデンの海」を連載）は教職、小説家、写真家として活躍。また、歴史研究で著名な馬場宏氏（旧東野町）、金原兼雄氏（旧大崎町）は郷土史研究家で多数の著作がある。

② 機帆船・船具（まきはだ、舟釘）

機帆船は戦前戦後、国内物流の主役で大崎上島・倉橋島など芸予諸島付近で建造された。また、船具（船で必要とする用品）の一つに、「まきはだ」（木造船の板と板のすき間に詰めて防水に使う）と舟釘がある。「まきはだ」は国内で最高70%が大崎上島で製造され、韓国などへも輸出された。

③ 商船学校（広島商船）の役割

明治31（1898）年に設立された広島商船は多くの船員を輩出して、日本の経済成長を支え、海運・貿易に多大なる貢献をしている。

④ 家屋

木造3階・5階建造物大正期に建築された、日本で唯一木造5階建ての家屋がある。当時の船大工の高い技術と地域の財政が豊かであったことの証と考える。

⑤ 機帆船

明治後期頃から建造が始まった。第一次大戦を契機として船の大型化が進み機帆船の登場は木造船業に大きな変化をもたらした。大正末期から昭和初期にかけては機帆船の建造が本格化し、最後の隆盛期を迎えた。

⑥ 家屋

日向材木・廻船問屋の豪商木造船（和船）に最も適した材料として日向弁甲（現在の宮崎県で伐採される杉材）が必要となる。また、廻船問屋として多数の船を所有した豪商がいた。

(2) 倉橋島

① 橋

昭和36年に瀬戸内海における離島への初の架橋事例として「音戸大橋」が音戸の瀬戸に架けられた。

船舶の通行量も多く大型船も通過する音戸ノ瀬戸における航路を確保するため、用地の少なかった倉橋島側を螺旋状の高架橋にするなど当時は世界的に珍しい施工方法で造られた。

② 造船

「唐船浜」などの地名や古文書において、遣唐使船などの建造が倉橋島においてなされたという伝聞が残っており、少なくとも平安時代には造船が倉橋島南部地域で始まっていたと思われる。倉橋島に立ち寄る北前船（千石船）などによって、技術を持つ人々が広い地域から集まり、北前船など和船から機帆船（図2）・石船の建造が、昭和30年代頃まで本浦地区から拡大して、倉橋島全域で盛んに行われていた。倉橋島南部の桂浜には、天然の入江を利用して作られた日本最古の乾式船渠（図3）

が残っている。江戸時代の元文、寛保年間頃に作られ、明治15年頃に現在の形に整えられた。干満の差が大きい地の利を活かした当時の建造・土木技術が高かったことがうかがえる。

③ 万葉集

平成元年に広島市で開催された「海と島の博覧会」に合わせて実物大で建造された復元遣唐使船（図4）は、この場所を利用して建造された。現在は、「長門の造船歴史館」において倉橋の造船技術史を紹介する主の展示物として一般公開されている。倉橋島の桂浜で詠まれた8首から、平安時代から瀬戸内の潮待ち風待ちの港であった事が推測できる。



Fig. 2 Launch ceremony of the sailing ship (S.15).

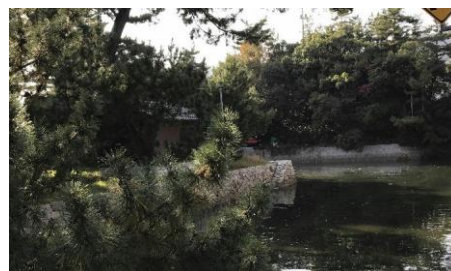


Fig. 3 Dry dock at Katsuragahama, Hiroshima.



Fig. 4 Kentoshi Ship.

2.3 文化的背景

大崎上島町では、子ども達に地域のことを理解し、愛する気持ちを育む教育を「大崎上島学」で実施されている。本校も出前授業などで協力している。子ども達が歴史的・文化的な学修により、将来、地域を愛し、活躍できる人材育成を目指している。そのために必要な地域にある資源を活用する。

① 造船技術と船具の変遷

島内の造船技術・船にまつわる話（聞き取り）について資料を収集する。木造船の建造・修理・整備に使われた「まきはだ」や「舟釘」などの「船具」の製造と行商

②海（港・漁業）・船と人の暮らし
汐待港・伝統的漁法（あび漁など）・地勢（塩田など）の変遷による年中行事の変遷（正月，お盆，秋祭りなど）に深い関係がある。

③自然を理解する，船を操る技術（航海術），信仰
減災のための観天望気（コチと呼ばれる東風が吹くと大風（台風）になるなど自然にまつわる知恵，「安芸地乗り」と呼ばれた島や岸に沿って安全に航海する航法，自然を相手にする船は信仰（金比羅宮参拝，厳島信仰）・祭礼行事を重要視している。

このような地域の歴史・伝統文化・産業の学びは，郷土を大切に思い，郷土を愛する心情につながる。現在，島で生活している人々が半世紀前には全国に類を見ないほど栄えていたとの心証は薄い。当時，島・海・海運（造船）がどのような事実について，収集した資料（文書・写真）を通じて克明に訴える資料を目指したい。

3. 研究内容

3.1 歴史文化研究会の立ち上げ

これまでの個々での活動では，得られる情報なども限りがあることから，大崎上島の発展と郷土の歴史・文化の調査並びに地域住民・行政・大崎上島地域協議会・学校（本校の教職員・学生及び近隣の教育機関・教育委員会など）及び有識者相互の親睦と協力を図ることを目的として事業展開するため，「広島商船高等専門学校 COC 大崎上島歴史文化研究会(H26.10.1～)」を設立した。

3.2 資料収集

卒業生，高橋得之助元校長，藤井安正名誉教授をはじめとする本校の旧教職員，地域住民や大崎上島地域協議会等から写真や資料の提供を受けることができた。大崎上島などに縁のある 10000 点以上の Fig. 5 に示すような写真・ネガ及びアルバムだけではなく・明治期の航海日誌・船員手帳・海技免状・六分儀・双眼鏡・卒業時の成績優秀者に広島県から送られた金時計などの資料を入手している。(Fig. 6, Fig. 7)



Fig. 5 Photo and negative film.

3.3 船舶の調査

大崎上島で建造されるなど，大崎上島に縁のある船舶を調査するため公益財団法人日本海事センターの海事図書館などで調査を行っている。

海事図書館は，海事関係の専門図書館であるため，船舶関係の書籍資料が蔵書数ともに充実しているので，大崎上島地域協議会から提供していただいた画像データを解析して，判読した船名をもとに，日本船名録などから，船の要目・造船所・所有者を調査している。

日本船名録などの，船舶に関する基本資料について，本校の所有が少ないため，海事図書館や国会図書館などにおいて継続調査中である。



Fig. 6 A contact ship connecting the island and the mainland.



Fig. 7 NIT Hiroshima College in the early Showa era.

3.4 学内調査

学内において，資料の収集・調査としては，本校図書館所蔵書籍，広島商船高等学校の時期に在籍された高橋得之助元校長（昭和初期から昭和 35 年在籍）のご遺族から提供のあった写真，書籍をはじめとする昭和初期から昭和 35 年までの資料，本校の歴史資料（広船新聞・大型の校旗・カッター用の艇尾旗などなど）・明治期以降に本校が作成した学校要覧などの資料及び創立記念などの記念誌（50 年，60 年，80 年，100 周年）作成用に集められた資料などを調査・整理している。

3.5 学外調査

学外調査として，公益財団法人海事センター海事図書館及び国会図書館などにおける書籍を中心とした資料調査や大崎上島の廻船問屋が多数所有し，寄港地であろう北前船（弁財船）について，寄港地であった港に設けられている博物館や海事関係資料館などを訪問して，大崎上島とのつながり，当時の様子や海事技術史全般を調査している。

特に学外調査では，本校が採択された地（知）の拠点事業(大学COC事業)による支援によるところが大きく，書籍資料などでしか知り得なかった現地を訪れる機会を持てたことは研究遂行に大いに役立っている。これまで，本研究に関して訪問調査を実施したのは北から函館市，青森市（野辺地町），新潟市，佐渡市，富山市，射水市，高岡市，金沢市，加賀市，東京，横浜市，大阪市，神戸市，姫路市，高松市，宇野市，倉敷市，福山市，尾道市，呉市などである。函館市では，函館高専で行われた高専シンポジウムへの口頭発表での参加と函館港周辺の調査，函館港の発展に深く関わった歴史を持つ金森倉庫，函館市北洋資料館，函館市青函連絡船記念館摩周丸の訪問調査を行った。青森市では，みちのく北方漁船博物館から

野辺地町に無償譲渡された、北前船の復元船「みちのく丸」の見学と同船の保守整備について聞き取り調査を行った。富山市では、北前船廻船問屋森家を訪問調査した。射水市では、帆船海王丸を訪問し保管されている昭和5年からの資料を調査した。高岡市では、伏木北前船資料館（旧秋元家）を訪問調査した。廻船問屋であった建物の見学と北前船の到着などを監視していた望楼に登り当時の港の様子を直接見渡すことが出来た。また、船絵馬や引き札（当時のチラシ・ポスター）が多く展示され、北前船西航路を構成していた各地域の港に存在した多くの店が全国区で商いを行っていた史実を知ることができた。金沢市では、石川県銭屋五兵衛記念館を訪問し、廻船問屋と石川県の振興に尽力した銭屋五兵衛の足跡を調査した。加賀市では、北前船の船主を多く輩出した橋立地区にある北前船の里資料館を訪問調査した。資料館の近くにも別の船主の家が一般公開されていた。資料館では全国から集められた北前船の写真資料を多数見ることができた。新潟市では、北前船ゆかりの金刀比羅神社をはじめとする多くの神社や安全航海で寄進された江戸時代からの北前船の小型模型を見ることが出来た。また、新潟市文化財となっている北前船船主であった旧小澤家住宅も訪れた。佐渡市では、北前船が多く寄港していた港である小木、宿根木を調査し、瀬戸内海の尾道で製作された花崗岩で出来た Fig. 8 に示す舟つなぎ石鳥居など、北前船が実際に運んだ物を直に調査することができた。また、宿根木地域の調査資料を読んで見ただけでは、狭い集落であるが限られた土地を有効活用してコミュニティを築いていた当地の様子を直に見ることができた。米の産地である新潟の米が小木へ運ばれてから、東北から北海道へ、また瀬戸内海経由にて関西方面へ運ばれた史実を知り得た。佐渡国小木民俗博物館では、現在の日本に存在する実物大の北前船数隻の中で、絵図から復元された北前船の白山丸を調査する機会を得た。前述のみちのく丸同様に長く保管されて多くの方々が見られる機会が続くように願うばかりである。今後も、大崎上島周辺地域の離島につながる資料の調査に海事図書館をはじめ、瀬戸内海歴史民俗資料館・北前船の寄港地及び博物館などへ訪問する予定である。



Fig. 8 Boat stone (Granite carried from Onomichi).

現地へ赴いて行う現地調査は、文献調査だけでは、知る得ることが困難な事項を解決することができる。また、地域での研究会など現地ではしか入手できない資料も多いことが、多く場所を訪問してあらためて判ることが多く、現地調査の重要性を再認識した。資料だけでは無く、当地に居られる関係者への聞き取り調査で得るものも多かった。

4. まとめ

これまでに収集した資料・写真データをもとに再編集して、大崎上島と本校の歴史年表〔第一版〕を作成した (Fig. 9)。作成した年表は、平成27年度のCOC成果報告会（大崎上島町）・本校校友会総会（東京）・平成27年度アイランダー（東京）において展示・発表を行った。口頭発表として、平成27年1月10日第20回高専シンポジウム in 函館に参加し発表を行った。年表については、今後も、加筆修正を行い大崎上島町内の「ふれあい郷土資料館」、「海と島の歴史資料館」、港の待合室などで展示を行う予定である。



Fig. 9 History chronology.

謝 辞

資料調査でご協力いただいた、中国運輸局尾道海事事務所並びに呉海事事務所、大崎上島町地域協議会ほか資料の貸出、寄贈でお世話になった皆様に篤く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 清田耕司, 大内一弘, 藪上敦弘, 大西流星: 離島における地(知)と技の継承, 第20回高専シンポジウム in 函館, 講演要旨集, E-12, 2015.
- 2) 清田耕司, 松島勇雄, 大内一弘, 山田健治, 脇山功, 岡崎環, 榎本江司: (郷土における知の伝承) 船舶に起因する地(知)と技の継承事業, 2016年次日本島嶼学会大崎上島大会研究発表要旨集, pp.30-33, 日本島嶼学会, 2016.
- 3) 清田耕司, 大内一弘, 山田健治, 岡村修司, 脇山功, 岡崎環, 中道豪一, 田葉行宏, 半田康博, 榎本江司, 木原賢二, 松島勇雄: 船舶に起因する地(知)と技の継承事業, 大学COC事業平成27年度成果報告書広島商船高等専門学校, pp.156-159, 2016.
- 4) 林寛司編, 戦時日本船名録<その要目と戦時被害記録>, 戦前船舶研究会, 2006.